

平成25年度卒業生の皆様へ  
建学の精神「<sup>あらみたま</sup>荒魂・<sup>あらみたま</sup>勇氣」発動のための根源的自覚  
—限りなく自分自身が縮小衰退した時のために—

九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学  
専門学校九州リハビリテーション大学校  
学長 室井 廣一

「人生には山あり谷あり坂があり」等という言葉は使い古され手垢の付いた言葉であるが、依然として真実味は失わない。真剣にたった一回きりの人生を生きようとするものにとっては避けがたい事実を物語っているからである。人間はいつだって幸せに楽に生き続けるということは、どんな恵まれた人だって困難であろう。様々な現実の困難危機に直面して人は多様な選択を迫られる。努力奮闘の上乗り越える人も、挫折せざるを得ないという人もある。事態を斜めに見たり、ごまかしたり、はぐらかしたり、傍観者の態度に終始する人もいれば、自己を激しく緊張させ怒りふてくされ周囲の人に迷惑をかけ終局的には誰からも煙たがられ絶望のふちをさ迷いながら、いつしか自己を狭い自意識のなかに閉じ込めてしまう人もいる。自殺率の高さが話題にもなったが、絶望的になってそういう最悪の選択に追い込まれる人もいる。リアルな人生の過程では、大抵の人は何度となくそういう自分自身が限りなく縮小衰退せざるを得ない時に遭遇する。

私はそういうときにこそ、本学で学んだ建学の精神「<sup>あらみたま</sup>荒魂・<sup>にぎみたま</sup>勇氣」「<sup>さちみたま</sup>和魂・<sup>くしみたま</sup>親和」「<sup>あらみたま</sup>幸魂・<sup>あらみたま</sup>愛」「<sup>あらみたま</sup>奇魂・<sup>あらみたま</sup>知性」の四つの心を大きく発動して、直面する危機を打開してもらいたいと思う。これまでもオリエンテーションや行事式典の学長講話などを通して建学の精神の四つの心の発動、発展、統合、調和については何度も語ってきたが、ここでは特にそういう危機打開を目指し「<sup>あらみたま</sup>荒魂・<sup>あらみたま</sup>勇氣」発動のための「根源的な自覚」というようなことについて記しておきたい。「<sup>あらみたま</sup>荒魂・<sup>あらみたま</sup>勇氣」を語ることは、結果的には四魂・四つの心全部に及ぶことになるが、一応分けてみて、まずは筆頭に来る「<sup>あらみたま</sup>荒魂」発動のための根源的自覚の重要性から述べてみる。

「荒魂・勇氣」というのは「進んでやれる元気な心」のことを言う。自動車と言うならエンジン・アクセルである。人間は動物であって、言うまでもなく

動く存在であるから、自己を動かし駆り立てるこの積極的な心が肝心要ということになる。しかしこの心は、けっこう広がりがある、対極的には、動きを抑圧する、制御する、我慢する力としても出現する。単に、四つの心のなかの知性や理性の発動だけではない。我慢の勇氣、耐える心というのも荒魂なのである。このあたりは少々難解なのだが本学園の創設者の学問の系統ではそういう理解となる。この概念の広がり・特性については元祖の本田靈学に遡ることになるので、ここではこれ以上言及できない。とにかく、この心が発動しない限り主体的実践的行動など到底期待できない。何をするのにも元気な心が先ずもって発動されねばならない。「俺はやるぞー、進んでやるぞー」という元気澁刺の心がみなぎっていなければ、人は弱くなってしまふ。有名な項羽や孟子の「力は山を抜き氣は世を覆<sup>おお</sup>う」「千万人と雖<sup>いえど</sup>も吾ゆかん」というような気概が大切なのである。

人は誰でも調子のいい時、上り坂の時は元気なものであるが、いざ危機や困難が差し迫って来ると意外に脆いものである。絶望感が押し寄せてきて、行動の気力など吹っ飛んでしまふ。それこそ限りなく自己が縮小衰退してしまふ。そして自己固有の荒魂を忘れ失意のどん底に落ちていく。

では、そういう危機状況下に自己の荒魂を大きく発動発展させるためにはどういう自覚が必要なのか。私がここで第一に言いたいことは、自分という存在の「非連続的連続性」というような根源的自覚のことである。我々の生命は、両親祖父母そして祖先まで非連続的につながって継続している。当たり前のことであるが、この意味するところは大きい。言うまでもなく、我々は個体としては、一度は死ぬが遺伝子を通してつながっている。大げさに言えば我々は非連続的にではあるが大昔から生き抜いてきている。悠久の歴史を生き抜いている。どんな時代のいかなる困難にも耐え抜いて生き続けてきたのだ。だから今ここにいる。弱くて生き抜くことが出来なかったら今ここにいるわけがない。今ここに存在しているということはまさしく強さの証拠である。これほどハッキリした証拠はない。弱かったならとても様々なこれまでの危険な状況を生き抜いて今ここにいるはずがないからである。どこかで途絶えているからである。祖先以来のあらゆる危機困難を乗り越えてここまで非連続的にではあるが連続している我々が弱いはずはないのだ。いかなる危機絶望でも乗り越えてきた、その経験と場数はもの凄い力を秘めている。すごい生命力なのだ。まっさらな気持ちになって自分を見直さねばならぬ。太古の昔から生き伝わっている自己

固有の<sup>あらみたま</sup>荒魂を見つめるのだ。深く自覚するのだ。必ず元気が<sup>よみがえ</sup>甦ってくる。甦ってくれば、自己を縮小し衰退させるなどということは、この永遠のごとく生き抜いてきた祖先からの生命力にすまないことなのだという気持ちがこみあげてくるはずだ。それが分かった時は居住まいを正して自分の中の非連続的に連続性をもった生命力に率直に詫びを入れなければいけない。尊重尊敬すべき尊い命を継承している自分を忘却し感謝せねばならぬところを履き違えているわけだから。どうか自己固有の<sup>あらみたま</sup>荒魂をまっさらな心身で素直に直視してもらいたい。必ず荒魂が見えてくるはずである。分からないでは済まされないのだ。

生き続けるという凄みがどんなものであるか、それはその非連続的連続のあり方にあらわれている。かつてNHKのテレビで生殖細胞の生成過程を見たことがあったが、二～三億以上の精子が競争してたった一匹の精子だけが卵子に結ばれるというすさまじい競争画面であった。「三億」という競争者を蹴落として首位に立ったのが他ならぬ「自分」なのである。我々は正しくナンバーワンなのであった。一番であったから生命力を継続したのだ。そうでなければ誕生できなかったのだ。はじめから生まれながらの一番なのだ。たいした存在なのだ。

次に三つ目に我らがすごい存在であるということは、この世の中に生まれ出てくる時の、あの始源の限界状況からの脱出を思い出せばいい。我らはまるで生木を裂くがごとく母子分離して鮮血ほとばしるがごとき状態で、悪くすると窒息死するような真っ暗な母親の体内を締め付けられながら、たった一人で生まれてきた。そして産声という泣き声をあげた。めでたい誕生の時に泣き泣き生まれてくる、その泣き声に含まれている意味とは果たして何であろうか。誰でも思うだろう。誰でも見る誕生の瞬間のあの涙の意味とは何なのか。母子分離の悲しみからの母を呼ぶ必死の涙か、締め付けられながらようやく世に出た苦悶と解放感の入り混じったものか、それとも母親と別れ、たった一人命がけで生まれ出るという厳しい限界状況を潜り抜け耐え抜いたという自立自信感から無意識にこみあげてきたものか。いずれにしろ、たった一人ですさまじい孤独と苦しみのなかを乗り切るという強烈な試練を、この世の始まりに体験させるということは非常に意味深い。これからの人生を生き抜く荒魂・勇気をこの世の創造者から授与されたということであろう。これほどの苦しみと孤独に耐え抜いたのだから、これからの人生のどんな試練苦悶煩悶も乗り越えていけるという自信と忍耐力を授与されたということである。こうして生まれながら頂点に立ったものがすさまじい試練苦しみを経て鍛えに鍛えられてこの世の一步

を踏み出すというわけであるから、この根源的な生成過程だけをみても我々が弱くあるはずはないのである。断じて強いわけである。弱く思えるのは、事態の厳しさに荒魂・勇気を見失い自己を萎縮・矮小化させているからである。

次に四つ目に「四魂の勢揃いの自覚」ということを述べておきたい。我々には悠久の歴史を生き抜きどんな困難危機をも乗り越えてきた生命力があり、それが四つの位相をもって存在しているという自覚である。我々は本来的こういう四つの力をもって過去のあらゆる困難を乗り切ってきたのだ。だから今生きているのだ。人は成長するにしたがって、「四つの心・勇気・親和・愛・知性」をそれぞれの個性を持ちながらも発達させていく。人によっては、運動神経に恵まれ、体力があり、<sup>あらみたま</sup>荒魂が早く発動発達する人もいれば、記憶力や言語表現に秀でている人は<sup>くしみたま</sup>奇魂・知性が発展する。又、温和で優しい人は<sup>にぎみたま</sup>和魂・親和力、あるいは<sup>さちみたま</sup>幸魂・愛が優先的に発達してくる。そして誰でも発達過程ではこの四つの心が激しく衝突し<sup>きし</sup>軋みその衝突と均衡回復あるいは不均衡を通して自分なりの自我個性をつくっていく。尚、ここでいう四つの心の範疇は一応理解のために区別しているが、元々は一つの生命力の発現形態で厳密に分けられるものではない。つまり一つの生命力の発現特徴を概念的に捉えたもので、いわば生命力の四つの位相とでも言うべきである。そういう意味では一つの<sup>みたま</sup>御魂の発動発展に集中化する人も出てくるが(幼児期の英才教育等)、人生のある一時期そういう一つの御魂への集中持続を試みて、そこから他の御魂にいたるという四魂自覚の道もあろう。しかし成人式を迎える頃ぐらいには、一応四魂全体の存在を把握自覚できるようにならなければなるまい。せつかく受け継いだこの生命力がどういうもので、どのように発動発展しいかなる調和を遂げるのか、しっかりと心の鏡に写し出せるようにならなければなるまい。ただヤル気だけではなく、周りとも調和をとり、生かされている自分の真実に感謝し知性と理性を発揮して世界の真実を見極める、そういう四つの心が自分の中に个性的に勢揃いしているかどうか心の鏡で見通さねばならぬ。それらが自分の中に生き生きとそろっているということを自覚できたらかなりのことが出来るはずだ。自分にはヤル気があって、それを共に目指せる仲間作りの親和力があって、そしてそれを見守ってくれている両親や先生方の愛が在って、そして更に、そのヤル気を実現に向かって着実に進めてくれる知性・理性が揃っていると知れば、現状は不遇でも自力でこれらの四魂を発動し発展させ、これから「何でも」出来るではないか。強力な自分がすでに出来上がっているということだ。多少の

不均衡やでこぼこは、自己の個性と考<sup>えたい</sup>して<sup>気にする</sup>ことはあるまい。

以上のようなことを考<sup>えただけ</sup>でも、かなり荒<sup>あら</sup>魂<sup>みたま</sup>を<sup>発動</sup>し<sup>元気強力</sup>になれるはずだが、しかしこれまでの所<sup>だけ</sup>ではあくまでも<sup>観念的</sup>なもので<sup>抽象</sup>の域を出<sup>て</sup>いない。荒<sup>あら</sup>魂<sup>みたま</sup>・<sup>勇気</sup>発<sup>動</sup>のためには、も<sup>っと</sup>も<sup>っと</sup>現<sup>実的</sup>に<sup>実践的</sup>に<sup>具体</sup>的にならねば<sup>だめ</sup>である。こんな話を<sup>抽象的</sup>に<sup>言葉</sup>で<sup>語</sup>っても<sup>知性</sup>の<sup>心</sup>が<sup>反</sup>応する<sup>程度</sup>で、な<sup>かなか</sup>持<sup>続的</sup>な<sup>荒魂</sup>の<sup>発動</sup>には<sup>行</sup>かない。すぐ<sup>に</sup>し<sup>よ</sup>げ返<sup>っ</sup>て<sup>し</sup>ま<sup>う</sup>。問題はこの<sup>四つ</sup>の<sup>心</sup>が<sup>現</sup>実<sup>を</sup>生<sup>きる</sup>目的と<sup>ど</sup>の<sup>よ</sup>うに<sup>自</sup>覚<sup>的</sup>に<sup>結</sup>ぶか<sup>と</sup>いう<sup>こ</sup>と<sup>で</sup>ある。その<sup>時</sup>こそ<sup>荒魂</sup>が<sup>まさ</sup>しく<sup>荒々</sup>しく<sup>現</sup>実<sup>的</sup>に<sup>具体</sup>的に<sup>燃</sup>え<sup>上</sup>がる。自分は何<sup>故</sup>生<sup>きて</sup>いるのか、生<sup>きる</sup>目的・<sup>テ</sup>マ・<sup>志</sup>とは、「俺は<sup>こ</sup>んな<sup>こ</sup>とが<sup>し</sup>て<sup>え</sup>」「<sup>わ</sup>く<sup>わ</sup>く<sup>す</sup>る<sup>よ</sup>うな<sup>夢</sup>」、<sup>こ</sup>う<sup>い</sup>う<sup>自</sup>己<sup>の</sup>務<sup>め</sup>意<sup>識</sup>と<sup>四</sup>魂<sup>が</sup>結<sup>ば</sup>れ<sup>な</sup>け<sup>れ</sup>ば<sup>本</sup>当<sup>に</sup>持<sup>続的</sup>に<sup>現</sup>実<sup>的</sup>に<sup>強</sup>くな<sup>れ</sup>ない。この<sup>夢</sup>見<sup>る</sup>力<sup>こ</sup>そ<sup>が</sup>荒<sup>あら</sup>魂<sup>みたま</sup>・<sup>勇</sup>気<sup>な</sup>のだ。これが<sup>発</sup>動<sup>し</sup>実<sup>践</sup>活<sup>動</sup>が<sup>始</sup>ま<sup>れ</sup>ば<sup>他</sup>の<sup>三</sup>魂<sup>が</sup>その<sup>程</sup>度<sup>は</sup>別<sup>と</sup>して<sup>連</sup>な<sup>っ</sup>て<sup>発</sup>動<sup>し</sup>て<sup>く</sup>る。五<sup>つ</sup>目<sup>に</sup>言<sup>いた</sup>い<sup>こ</sup>とは<sup>自</sup>分<sup>に</sup>は<sup>悠</sup>久<sup>の</sup>歴<sup>史</sup>を<sup>生</sup>き<sup>抜</sup>いて<sup>き</sup>た、<sup>目</sup>的<sup>に</sup>向<sup>か</sup>う<sup>目</sup>的<sup>に</sup>結<sup>ぶ</sup>四<sup>つ</sup>の<sup>魂</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>と</sup>いう<sup>自</sup>覚<sup>の</sup>こ<sup>と</sup>で<sup>あ</sup>る。「この<sup>夢</sup>が<sup>あ</sup>れば<sup>俺</sup>だ<sup>っ</sup>て<sup>ど</sup>んな<sup>困</sup>難<sup>でも</sup>乗<sup>り</sup>越<sup>え</sup>て<sup>い</sup>ける」という<sup>意</sup>識<sup>自</sup>覚<sup>と</sup>四<sup>魂</sup>の<sup>結</sup>合<sup>の</sup>こ<sup>と</sup>で<sup>あ</sup>る。

幼少期から種々なその時その場の目的性に絡み合<sup>っ</sup>て<sup>発</sup>達<sup>し</sup>て<sup>き</sup>た<sup>四</sup>魂<sup>が</sup>、<sup>本</sup>当<sup>に</sup>発<sup>展</sup>調<sup>和</sup>を<sup>遂</sup>げ<sup>て</sup>い<sup>く</sup>た<sup>め</sup>には、この<sup>四</sup>魂<sup>を</sup>心<sup>の</sup>畑<sup>に</sup>統<sup>合</sup>陶<sup>冶</sup>し<sup>自</sup>覚<sup>的</sup>に<sup>自</sup>己<sup>の</sup>生<sup>涯</sup>の<sup>目</sup>的<sup>の</sup>核<sup>な</sup>る<sup>部</sup>分<sup>と</sup>結<sup>び</sup>合<sup>わ</sup>さ<sup>れ</sup>ね<sup>ば</sup>なら<sup>ぬ</sup>。自分<sup>の</sup>中<sup>に</sup>勢<sup>揃</sup>い<sup>し</sup>た<sup>四</sup>魂<sup>・</sup>四<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>が<sup>立</sup>派<sup>に</sup>発<sup>達</sup>統<sup>合</sup>調<sup>和</sup>を<sup>遂</sup>げ<sup>て</sup>い<sup>れ</sup>ば<sup>必</sup>ず<sup>自</sup>己<sup>本</sup>来<sup>の</sup>目<sup>的</sup>を<sup>呼</sup>び<sup>求</sup>める<sup>よ</sup>う<sup>に</sup>なる。地<sup>に</sup>潜<sup>め</sup>る<sup>龍</sup>が<sup>雲</sup>を<sup>起</sup>こ<sup>し</sup>雨<sup>を</sup>降<sup>ら</sup>し<sup>己</sup>の<sup>天</sup>命<sup>に</sup>目<sup>覚</sup>め<sup>天</sup>上<sup>に</sup>向<sup>か</sup>っ<sup>て</sup>飛<sup>翔</sup>する<sup>よ</sup>う<sup>に</sup>。そ<sup>し</sup>て<sup>そ</sup>の<sup>目</sup>的<sup>を</sup>追<sup>い</sup>求<sup>め</sup>て<sup>い</sup>く<sup>な</sup>か<sup>で</sup>、様<sup>々</sup>な<sup>困</sup>難<sup>を</sup>乗<sup>り</sup>越<sup>え</sup>な<sup>が</sup>ら<sup>今</sup>度<sup>は</sup>その<sup>目</sup>的<sup>が</sup>四<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>を<sup>更</sup>に<sup>発</sup>展<sup>さ</sup>せる。四<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>と<sup>目</sup>的<sup>は</sup>具<sup>体</sup>的<sup>現</sup>実<sup>の</sup>実<sup>践</sup>過<sup>程</sup>の<sup>な</sup>か<sup>で</sup>相<sup>互</sup>に<sup>切</sup>磋<sup>琢</sup>磨<sup>し</sup>成<sup>長</sup>する。そ<sup>し</sup>て<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>日<sup>か</sup>、四<sup>魂</sup>に<sup>ふ</sup>さ<sup>わ</sup>しい<sup>目</sup>的<sup>が</sup>生<sup>成</sup>さ<sup>れ</sup>る。四<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>か<sup>ら</sup>四<sup>魂</sup>に<sup>いた</sup>る<sup>全</sup>領<sup>域</sup>を<sup>踏</sup>ま<sup>え</sup>て<sup>目</sup>的<sup>を</sup>追<sup>い</sup>求<sup>め</sup>て<sup>い</sup>け<sup>ば</sup>、い<sup>つ</sup>し<sup>か</sup>そ<sup>の</sup>目<sup>的</sup>は<sup>単</sup>なる<sup>表</sup>面<sup>的</sup>な<sup>欲</sup>望<sup>自</sup>己<sup>の</sup>目<sup>的</sup>性<sup>を</sup>超<sup>越</sup>して<sup>四</sup>魂<sup>が</sup>求<sup>め</sup>る<sup>着</sup>実<sup>な</sup>務<sup>め</sup>意<sup>識</sup>へ<sup>と</sup>高<sup>ま</sup>る。この<sup>段</sup>階<sup>に</sup>達<sup>し</sup>た<sup>四</sup>魂<sup>の</sup>目<sup>的</sup>は、<sup>目</sup>的<sup>と</sup>いう<sup>よ</sup>り<sup>も</sup>も<sup>は</sup>や<sup>天</sup>命<sup>と</sup>い<sup>っ</sup>て<sup>い</sup>い。こ<sup>う</sup>い<sup>う</sup>レ<sup>ベ</sup>ル<sup>の</sup>四<sup>魂</sup>と<sup>目</sup>的<sup>の</sup>結<sup>合</sup>の<sup>自</sup>覚<sup>を</sup>「<sup>天</sup>命<sup>の</sup>授<sup>受</sup>」と<sup>い</sup>う。百<sup>万</sup>都<sup>市</sup>・北<sup>九</sup>州<sup>有</sup>数<sup>の</sup>大<sup>交</sup>差<sup>点</sup>に<sup>面</sup>した<sup>本</sup>学<sup>の</sup>二<sup>号</sup>館<sup>の</sup>高<sup>く</sup>そ<sup>び</sup>え<sup>る</sup>塔<sup>は</sup>、四<sup>魂</sup>を<sup>発</sup>動<sup>発</sup>展<sup>さ</sup>せ<sup>固</sup>有<sup>の</sup>天<sup>命</sup>を<sup>獲</sup>得<sup>し</sup>雄<sup>大</sup>な<sup>人</sup>生<sup>に</sup>向<sup>か</sup>う<sup>学</sup>生<sup>諸</sup>君<sup>の</sup>姿<sup>を</sup>蒼<sup>き</sup>龍<sup>に</sup>託<sup>し</sup>た<sup>構</sup>想<sup>デ</sup>ザ<sup>イ</sup>ン<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>。

最初から天命授受とまでいかなくも目的を強烈に意識した人は心の畑の荒魂・勇気を発動できる。それを真剣に追いかけて育てていけば、目的そのものに変容が生じてもいつしか必ず自分の本物の「夢・務め」に出会うことができる。目的の広がりも出てくる。四魂の花が咲く。人は生きる目的を自力で強烈に創造・発見・獲得することによって自分の荒魂・勇気に出会い強力な存在になれるのだ。もとより最初から天命など簡単に見つかるはずがない。出来るところから夢を見るのだ。どんな小さな、ちっぽけな夢であっても、人からどのように見られようとも夢に変わりはいささかもない。持ってない人とは土台違うのだ。心の畑に自力創造の夢を持って貫いている人こそ「一人でいて淋しくない人間」なのである。強くなりたいなら自分の心の畑に自力でどんな小さな花でもいいから育ててみることだ。ただその場合、自己の花畑と四つの心が雑草まみれ、汚れに汚れていてはとても生命力のある花は咲けないであろう。心の畑と四つの心がまっさら真澄でなければ立派な天命の花は咲きようがない。常に心身のお掃除が大切だということである。(拙著『お掃除門』東筑紫短期大学発行、平成25年参照)

次に六つ目には個性的存在としての自覚の大切さということをあげたい。これが分かってくると人はかなり強くなれる。前述したように、自分がすでにナンバーワンであると同時に実はオンリーワンであるという事が自覚できるからである。人はナンバーワンでなければオンリーワンになどなれないのだ。私なんかは青少年期にそういう深い意味が分からず、他人と比較しては、自分の恵まれていないところを恨んでいた。自分は人と比較すると運動神経が鈍く動きに機敏さがなく、やせすぎていて体力もなく、よくからかわれ馬鹿にされてきた。顔もスタイルも悪くカッコいい人を見るとうらやましかった。生まれたところも交通便の悪い僻地の山村で通学には非常に辛い思いをした。冬の雪の吹きさらしで頬は血管が浮き出て赤ら顔となり、言葉は東北のなまりがあって人の前に出るのも話すことも恥ずかしかった。お金持ちの人は恵まれていいなあとと思った。周りの人がうらやましくてならなかった。しかしこの学園に26歳の時に就職して創設者から四魂の個性的発達やそれに応じた務めを持つことの大切さ、お掃除の秘儀などを学び四魂の発展過程が、人生の経験がその人の個性を創りあげていくということを知った。65年間生きてきて我が国だけでなく外国も周って見たが確かに自分のような人とは会えなかった。自分が世界唯一の個性的存在だということのある時に自覚できた。いくら自分が

人に劣っている存在だとしても自分と同じ人は世界のどこにもいなかった。外面的にあるいは内面的に似たような人はいても全く同じ人はいないのだ。私を  
生きている人は私しかいないのだということを知った時は本当に驚いた。だと  
すれば、自分が今現在人から見ればどんなに馬鹿げたことをやっても、ど  
んなに惨めに苦しんでいても、屈辱のふちに埋没しかかかっていても、病気にな  
っていても、こんな経験を積み重ねているのは世界人類史上俺一人だと思っ  
たら、ものすごく元気になれた。苦しくても痛くても切なくともその厳しさが  
世界唯一の体験だというのならそれこそは真に貴重で尊い体験ではないか。「こ  
れは俺しか味わえない苦しみののだ」と思ったらすごく貴重なありがたい体験・  
実践として前向きに受け止めていけるようになった。積み重ねてもいこうと思  
った。いつか莫大な貯金に化けるような気分にもなった。間違った解釈かも知  
れぬが「天上天下唯我独尊」といったお釈迦様の心もなんとなく分かりかけた。  
それから暗かった自分が少しは明るくなれたのだ。

人は個性的存在としての自分を知りそこから自分しかできない目的をつかみ  
取り、それとひたむきに格闘しながら四つの心を「四魂統一」のレベルまで高  
め、「自己固有の天命の花」を咲かせることが大切なのである。四つの心でつか  
んだ目的を、たとえ途中でいかように変容変形しようとも四つの魂のレベルま  
でひたむきに貫いていくことが肝心なのである。人はそういう夢追いの人生過  
程で何度も躓<sup>つまづ</sup>きひっくり返し生傷に滴る鮮血をなめながら荒魂・勇気を発動し  
続け、その実践の積み重ねのなかで、初めて自分を生かしている悠久の生命力  
とその固有の生命力の夢に気付くのである。本学の創設者は務めに向かった「実  
践は全<sup>まった</sup>きものである」という言<sup>こと</sup>霊<sup>だま</sup>を繰り返し発せられた。我われは自分の生を  
自己の天命に向かってひたむきに実践する時にこそ自己を生かしてくれている  
力に直面できる。生きる力と生かしてくれている力の両者両方に真剣に気づく  
時、初めて我われは「ダブルサイドの力」に触れることができるのである。本  
物の強者になれるのだ。創設者の言う「全<sup>まった</sup>き力」とはそのようなダブルの力と  
理解すべきであろう。ここでの、この七つ目の力の自覚についてはもう少し突  
っ込んで語らないと少し難しいかも知れぬがここではもうこれ以上語ることは  
できないのでよくよく考えてもらいたい。いずれ思い至る時がくるはずだ。

以上、ここでは荒魂・勇気を発動させてくれそうな根源的な意識・自覚につ  
いて七つほど語ってみた。心が折れそうになったり、心の畑が雑草だらけにな  
ったり、汚れに汚れ縮小衰退した時は母校の建学の精神を思い出しこの七つの

自覚で、<sup>きょうあいか</sup>狭隘化した意識を拡大し必ず「荒魂・勇気」を発動振興し本当の自分の存在の強力をもって危機困難苦悩を打開していつてもらいたい。

(平成26年2月2日 平成25年度卒業生の前途を祝して記す)